

〈論文〉

# 古文読解における係り結び

—『土佐日記』における「ぞ」「なむ」を中心に—

阿久津 智

## 要 旨

古典読解に係り結びを生かす方法を考えるため、『土佐日記』に係り結び（係助詞）がどのように現れているかを調べた。とくに、地の文における、「強意」を表す係助詞「ぞ」、「なむ」を含む係り結びの用法を探った。その結果、「ぞ」と「なむ」には、ともに、係助詞の用法として、(1)限定・対比・排他的な意味を表す用法（卓立強調）、(2)感情の焦点を表す用法（情緒的な強調）が見られたほか、係り結びの談話的な機能として、(3)話に区切りをつける用法が見られた。このうちの(3)などは、文章構成を把握するのに役に立つものであり、古典の読解に活用できるものと思われる。

キーワード：係り結び、土佐日記、古典文法学習、古典の読解、文章構造

## 1. はじめに

本稿では、『土佐日記』<sup>(1)</sup>における係り結びの現れ方を見ながら、古典の読解に係り結びを積極的に生かす方法を考えていきたい。

筆者は、先に、古典文法学習における係り結びの扱いについて論じたが（阿久津 2018）、そこでは、いわゆる「係り結びの法則」（係助詞と文末との呼応形式）を、構文（文の種類）にとらえる見方を挙げ、また、係り結

びの、文章中における役割（談話的機能）を読解に生かす可能性などを示した。本稿では、高校の古典学習で扱われることの多い『土佐日記』（紀貫之著、935年頃成立）を取り上げて、その本文、とくに地の文に見られる係り結びの役割について、「強意」の係助詞とされる、「ぞ」、「なむ」を含むものを中心に考えていきたい。以下、まず、係り結びの機能について、これまでの研究で明らかにされてきたことを概観し（2節）、次に、『土佐日記』において係り結びがどのように使われているかを見（3節）、最後に、その結果を古典読解に生かす方法について考える（4節）。

## 2. 係り結びの機能

ここで見ていくのは、古典文法（文語文法）の基礎となった平安時代（中古）<sup>(2)</sup>における係り結びである。平安時代は、係り結びが盛んに用いられた時代であるが、近年の研究によれば、「中古は係り結びの量的な意味での全盛時代のように認められるが、盛りの姿が末の姿である」（『日本語文法事典』「係り結び1」）、「中古の係り結びは文法的には形式化し、さらに形骸化した末の姿になったのであって、それでもおしゃべりの際には愛用されている」（野村 2011: 98）などとされる。また、本来、「文情報の中心点」（焦点）を示していた係助詞は、「文の情緒的な卓立点（強調点）」（「一文の中で多少なりとも感情の込められた場所」）を示すだけのものとなっていたという（同辞典「係助詞2」、野村 2011: 98）。だとすれば、平安時代における係り結びの主な機能は、「卓立点（強調点）」を表すという機能は別として（a）「文構造の枠組みを形式的に決定する」（同辞典「係り結び1」）という統語（構文）論的な役割と、（b）談話（文章）において何らかのしるしになる、という談話（文章）論的な役割にあるということになるのではないだろうか。これを、古典文法学習に取り入れる場合、（a）係り結びを構文（文の種類）として扱い、文語による文作り（短歌

や俳句を含む)などを試みる、(b)係り結びの文章中における役割を示し、それを読解に取り入れる、ということなどが考えられると思われる。

本稿では、係り結びの中でも、「強調」や「強意」を表すとされる係助詞「ぞ」、「なむ」を含むもの（構文としては、「強調文」となる（鈴木 1977: 141））を中心に見ていくが、先に、「ぞ」と「なむ」との違いについて、ふれておく（もう1つの「強意」の係助詞「こそ」については、本稿で取り上げる『土佐日記』には少数例しか現れていないため（3.の表1参照）、ここでは、考察の対象としない）。先行研究では、「ぞ」と「なむ」は、ともに卓立の強調（プロミネンス）を表すとし、とくに、「なむ」に、話し言葉的で、聞き手への伝達や呼びかけを表すという特徴を挙げるものが多い。たとえば、『なむ』は恐らく話言葉に多く用ゐられ、転じて文章形式語として、一つの話語り伝える際の表現になつたのであらう。一方、『ぞ』は、事件や主観的な心情を客観的に写し出す場合に用ゐられたと思はれる。要するに、『なむ』は語る強調、『ぞ』は写す強調表現であるといへよう。」（宮坂 1952: 47）、「ゾの強調がナムやコソと異なる点は、山田孝雄氏の言われたように、『一つを特別に指定する』強調と考えるべきであらう。」「ナムは情をこめて相手にもちかける強調であると考ええる。」（伊牟田 1981: 67-68, 69）、「表現主体の判断・断定を示す機能をもつと考えられる『ぞ』の場合、終助詞との共起等他の要因がない限り、述定<sup>③</sup>の文の構成に関与するに留まるのに対し、『なむ』が用いられた文は、常に『述定+伝達』の文となるのである。」（森野 1987: 106）、「一ぞ（卓立）一なむ（卓立+聞き手への強い呼びかけ）」（近藤 2000: 239）などとされている。大学生向けの古典文法のテキストである『古典文法の基礎』（朝倉書店）には、次のようにまとめられている（沖森 2012: 102, 103）。

《地の文で用いられる「ぞ」》「ぞ」は「なむ」より語勢が強く、地の文や和歌に多く用いられた。会話文での使用は少なく、文章語的な性質を持っていた。

《「ぞ」と「なむ」の違い》「ぞ」と同じく文中の一要素への注目を示す強調を担うが、「なむ」はこれに聞き手への強い呼びかけを伴う。

《「なむ」の口語性》散文の会話文の中に多く用いられて、和歌にはほとんど使われない。

係助詞の談話論的な役割については、先行研究には、「なむ」に関するものが多い。たとえば、『なむ』の係り結びを含む文は、全体として聞き手に対して『おし出して確にことわる』という気持を示す、「現代語に於ける『……のだ』といふ指定的な言ひ方が強調を表はすと共に又、根拠のある説明、理由の提出といった意味を表はす場合に用ゐられる〔中略〕が、同様な性格がこの『なむ』の係り結びを含む文にも亦認め得ると思はれるのである。」(阪倉 1953: 10)、「係助詞ゾが、ヒトマズ、ココデ切ルヨ、という予告であるのに対して、係助詞ナムの機能は、ココデ大キク切ルヨ、という予告である。したがって、そのあとは話題が転換するか、短い補足がそれに続くか、さもなければ、そこでディスコースが途切れている<sup>(4)</sup>。」(小松 2001: 243)、『なむ』の用例に多い『用言の連用形+て+なむ』は言い訳の表現である。」(木下 2001: 32)、「聞き手を納得させるために説明する部分では、ナムが使用されるとかんがえられる。」(西田 2009: 51)、などとする見方がある。

係り結び(とくに「強意」の係助詞を含むもの)が、文章の展開(話の流れ)の中で切れ目を示す際に使われることは、高校生向けの(大学受験対策用の)古文の問題集における「段落分け」の問題などにも現れている。たとえば、ある問題集には、『土佐日記』の1月20日の記事について、「本文を三段落に分け、第二・第三段落の最初の五字(句読点も含む)を答えなさい。」という問題があるが、そこでは、第二・第三段落ともに、係り結びの後から始まる箇所が「解答」となっている<sup>(5)</sup>。本文を、青谿書屋本(後述)によって挙げる(本文に、濁点、句読点、かっこを施し<sup>(6)</sup>、踊り字を仮名に直し、適宜仮名に漢字を当てる(その際、原文が仮名表記

であることを示すため、ルビを付す)。当該の係助詞に下線を付す。和歌を『』でくくる。文番号を○数字で示す。以上、以下同じ。下の文章では、「解答」とされる段落の区切れに／を入れる)。

①廿日。②昨日のやうなれば、船出ださず。③皆人々憂へ嘆く。④苦しく心許なければ、ただ、日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日と数ふれば、指も損はれぬべし。⑤いと侘し。⑥夜は寝も寝ず。⑦二十日の夜の月出でにけり。⑧山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。／⑨かうやうなるを見てや、昔、阿倍の仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰り来ける時に、船に乗るべき所にて、かの国人、馬の鼻向けし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。⑩飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。⑪その月は、海よりぞ出でける。⑫これを見てぞ、仲麻呂の主、我が国に、かかる歌をなむ、神代より神も詠ん給び、今は上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しきもある時には、詠む。』とて詠めりける歌、『青海原振り放け見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』とぞ詠めりける。⑬かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、男文字に、様を書き出だして、ここの言葉伝へたる人に言ひ知らせければ、心を聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ賞でける。⑭唐土この国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。／⑮さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、『都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ』

この問題集の「解説・解答書」には、「第一段落は二十日のこと、第二段落は阿倍仲麻呂の話、第三段落は今（二十日）のこと。」とある。この日の記事には、『土佐日記』の中で、最も多く係り結び（係助詞）が現れている（「第一段落」1例、「第二段落」10例（会話文中1例）、「第三段落」1例（和歌））。係り結びは、とくに「第二段落」に集中しているが、

この部分は、「阿倍仲麻呂の話」であり、係り結びの多用によって、語り口調で、話が進められているともいえる。このような文章の展開は、『土佐日記』においてはここだけである。この日の記事では、「第一段落」の最後の文に、「第一段落」で唯一の) 係り結びが現れており、これが話に一段落がついたことを示すものとなっていると思われる（「第三段落」の直前にある、「第二段落」の最後の文にも係り結び（「…にやあらむ」）が現れているが、こちらの区切れは、むしろ「第三段落」冒頭の「さて」によって、はっきり示されていると思われる）。

このように、係り結びには、談話（文章）中において何らかのしるしになる、という談話（文章）論的な機能があると思われる。以下、『土佐日記』の本文を通して、このことについて見ていく。

### 3. 『土佐日記』における係り結び

本節では、『土佐日記』における係り結びについて見ていく。調査対象としたのは、『土佐日記』の全文であるが、とくに地の文における、「ぞ」、「なむ」を含む係り結びを中心に見ていく（ただし、両者の違いについては、とくに分析を行わない）。本文は、青谿書屋本による（『東海大学蔵桃山文庫影印叢書 第九卷 土佐日記・紫式部日記』を用いる）。ただし、池田（1941）などに従って、一部を訂正している<sup>(7)</sup>。

『土佐日記』を選んだのは、本文の確かさと、文章の扱いやすさからである。『土佐日記』には、作者である紀貫之の自筆本を忠実に写した（奥書に「書写之一字不違」とある）藤原為家本（1223写）が現存しており（複製本未公開）、また、それを正確に写し取った青谿書屋本（江戸初期写）がある（萩谷 1988: 98-104, 小松 2001: 41）。青谿書屋本には、為家本の誤写（と思われるもの）もそのまま写しているが（ほかに、ごくわずかであるが、独自の誤写もある（萩谷 1988））、池田（1941a）の「再建」に

より、ほぼ原典が復元され、本文が確定しており、これがテキストとして広く使われている（大木 2013: 33）。

『土佐日記』の文章は、日記形式であり、簡潔な文体をもつとされる。たとえば、「『土佐日記』という作品は、基本的に『それから…それから…』という文章を積み重ねた形として捉えることが可能ではないか。時間的には旅立ちの日から帰宅するまで、地理的には土佐から京までという一本の軸の上に、日々の記録が連ねられていくのである。」（篠原 1987: 176）、「土佐日記の文体については、従来より『簡潔な文体』ということが言われてきた。文は単文が多く、また文末が裸の用言の終止形で終わるものが多いといった文の特徴などからくる文の印象であると考えられる」（阿久澤 2002: 283）、「全体に、この『日記』を通底している文体の特徴は、なにしろほとんどが動詞、助動詞の終止形であっさりと終わっていることにある。もし平安女房文学だったら『…しはべりける』とでも言うようなところを、まるで愛想もなにもなく『…す』と書く。」（林 2005: 15）などといわれている。また、『土佐日記』には、「平安期の女流文学作品等には見えない語彙・語法がある。」とされるが、これについては、「土佐日記と漢文訓読との間には〔中略〕深いつながりがあるやうに思はれる。」、「当時、漢文を訓読する場合に用ゐられた言葉は、日常使ふ口語とは異なつた特殊なものであつて、物語随筆日記などの仮名文学の言葉（即ち口語に比較的近いと考へらえる言葉）との間には、相当大きな開きがあり、その違ひは今日からも一々指摘し得るほどであつたと考へられる。〔中略〕この土佐日記こそ、作者貫之が、二種の文体〔「訓読語」と「仮名文学語」〕を使つたといふ、典型的な一例と見られるのである。」（築島 1981: 401, 398-399）などとされている。このように、『土佐日記』は、漢文訓読的な表現が多く、文章が簡潔であり、そのために、文章展開が比較的たどりやすい作品といえる。

一方で、『土佐日記』は、通常の日記（旅行記）ではなく、「日記文学」

であり（木村 1963: 56），その主題や視点とかかわって，動作や感情の主体（主語）が明確でないところが多いという問題がある。『土佐日記』の主題については，主な説だけでも，土佐で亡くなった女兒への追慕をはじめとして，旅における感慨，歌論の展開，社会風刺などがあり<sup>(8)</sup>，一つには限定できないともいわれる<sup>(9)</sup>。これに関連して，日記の「書き手」を誰と見るかという問題もあるが，一般には，作者である紀貫之が女性に仮託して書いた（前国司（貫之）の周辺にいる女性を書いたという体裁をとっている）とされる。たとえば，東原・ウォーラー（2013: 11）では，「本当の書き手である紀貫之とは別に『前国守』の身边に伺候している女性を書き手として設定している。」としている。こういった見方に対し，小松（2018: 180-181）は，「女性仮託」説の根拠となる『土佐日記』冒頭の「をとこもすなる日記といふものを／をむなもしてみむとてするなり」（青谿書屋本の原文。／は改行）は，「女性仮託」ではなく，「漢字で書いている日記を，仮名文で書いてみよう。」（「をむなもし」を「女文字」ととる）と読むべきで，「肝心なのは漢字か仮名か，漢字文か仮名文かという，使用する文字種，文体の違いであるから，書き手の性別は無関係である。したがって，[中略] 女性仮託という仮説は問題外になる。」と主張する<sup>(10)</sup>。本稿では，「書き手」を，国司一行に同行する女性（侍女）としておく。文中に出てくる，前国司（＝貫之）に当たる，「ある人」，「船君」などは第三者として扱い，「書き手の分身」としては扱わないでおく<sup>(11)</sup>。そして，「また，昔へ人を思ひ出でて，いづれの時にか忘るる」（1月11日<sup>(10)</sup>）などは，「書き手」が，子を亡くした親の内面を描いた，自由間接言説<sup>(12)</sup>ととらえておく。

さて，本稿では，『土佐日記』の各日の記事において，各文がどのような内容もち，それがどう連なっていくか，どういうところに係り結びが現れるかを見る，というやり方をとる。たとえば，12月23日の記事は，次のように分析される。



## 《本文》

①廿三日。②八木のやすのりといふ人あり。③この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。④これぞ、偉はしきやうにて、馬の鼻向けしたる。⑤守がらにやあらむ、国人の心の常として、「今は」と見えざるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。⑥これは、物によりて褒むるにしもあらず。

## 《文章の展開》

①日付→②説明→③説明→④行為（＋意見）（「…ぞ…」）→⑤説明（＋意見）（「…や…，…なむ…」）→⑥説明（＋意見）

ここで、「行為」とは、時間的順序に従った、人の行為や状態（の継続）を表し、「説明」とは、時間的順序にかかわらずに説明しているものを表す。また、「意見」とは、評価・判断・感想などである。「行為（＋意見）」や「説明（＋意見）」は、その文に書き手の意見が含まれることを表す。

この記事の中では、係り結びは、④（「…ぞ…」）と⑤（「…や…，…なむ…」）とに現れている。④の「これぞ、偉はしきやうにて、馬の鼻向けしたる。」は、②・③で「八木のやすのり」を紹介したのに続いて、その人物の行為を述べ、評価している文である。この「…ぞ」は、「ほかの人とは違って、八木のやすのりこそは」という、限定・対比・排他的な卓立強調といえるが、この文は、「八木のやすのり」を紹介する部分のまとめにもなっている（なお、『土佐日記』には、限定・対比・排他的な表現である「のみぞ」が多く使われている（後述））。⑤の「守がらにやあらむ、」は、挿入句で、書き手の判断を表している。「…にやあらむ」は、『土佐日記』に多く見られる（地の文に7例）。同じ⑤の「…、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。」は、この記事全体のまとめともいえる文である（このあとの⑥は、補足というべきものであろう）。これは、2節に挙げた小松（2001）の見方に合うものであろう。

本稿では、上のようなやり方で、文章の展開の中で係り結びの現れ方を見

表1 『土佐日記』の係助詞

	地の文		和歌		舟唄		会話文		合計
	文中	文末	文中	文末	文中	文末	文中	文末	
「ぞ」	52	1	14	0	1	0	5	1	74*
「なむ」	13	3	0	0	0	0	0	0	16
「や」	16	6	6	1	2	0	3**	0	34
「か」	4	0	7	0	0	0	1***	0	12****
「こそ」	2	0	4	0	1	0	2	0	9

\*このほかに、「ざりける」(<ぞありける) 1あり。

\*\*「やは」1を含む。 \*\*\*「かは」1を含む。 \*\*\*\*このほかに、終助詞の「か」1あり。

てみた。なお、『土佐日記』に現れる係助詞の数は、表1のとおりである<sup>(13)</sup>。

さて、地の文に見られる、「ぞ」、「なむ」を含む係り結びの主な機能を、以下に、まとめて示す(『土佐日記』の各日における文章展開については、本節の終わりに表にして示す(表2))。『土佐日記』には、「ぞ」が多く使われているため<sup>(14)</sup>、「ぞ」の係り結びを中心に述べる(「ぞ」は、出現数が多いため、以下の例には、1月21日(12月21日の「門出」から30日目)までのものを挙げる。ただし、12月23日、1月20日については、すでに挙げたので、ここには挙げない)。

#### ◎「ぞ」、「なむ」の意味・用法

2節で見たように、「ぞ」と「なむ」の主な機能は、卓立強調であるとされる。『土佐日記』には、限定・対比・排他的な意味を表す「ぞ」が多く見られる。とくに限定を表す副助詞「のみ」や、副詞「ただ」とともに使われることが多い。「のみぞ」は、地の文に5例、現れている(ほかに、和歌に2例、会話文中に1例、現れている)。「のみぞ」の例を含め、限定・対比・排他的な意味を表す「ぞ」の例を挙げる(「のみ」、「ただ」に

点線を付す)。

(1) かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にて俄かに失せ  
にしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何事も言はず、  
京へ帰るに、女子の亡きのみぞ悲しび恋ふる。(12月27日④)

(2) 守の館の人々の中に、この来たる人々ぞ、心あるやうには、  
言はれ灰めく。(12月27日⑧)

(3) ただ、押鮎の口をのみぞ吸ふ。(1月1日⑦)

(4) ただ、波の白きのみぞ見ゆる。(1月7日④)

(5) 若葉ぞ今日をば知らせたる。(1月7日⑥)

(6) この人々ぞ、志ある人なりける。(1月9日③)

(7) まして、女は、船底に頭を突き当てて、音のみぞ泣く。(1  
月9日⑨)

(8) ただ、月を見てぞ、西東をば知りける。(1月11日④)

ほかに、上とは異なる（とくに限定せず、とくに対比の対象もない）、  
驚き、憂鬱、感動など、感情の焦点を示す、情緒的な強調と思われる「ぞ」  
も見られる<sup>(15)</sup>。

(9) 今日、破籠持たせて来たる人、その名などぞや、今思ひ出で  
む。(1月7日⑭)

(10) 口惜しく、なほ日の悪しければ、居ざるほどにぞ、今日、二十  
日あまり経ぬる。(1月15日③)

(11) この言葉、何とにはなけれども、物言ふやうにぞ聞こえたる。  
(1月21日⑩)

一方、「なむ」にも、限定・対比・排他的な意味を表す例が見られる  
（「のみなむ」は、地の文に1例）。

(12) ただ、海に波なくして、いつしか御崎といふ所渡らむとのみ  
なむ思ふ。(1月16日③)

(13) これを見て、業平の君の「山の端逃げて入れずもあらなむ」と

いふ歌なむ思ほゆる。(1月8日④)

◎「ぞ」、「なむ」の係り結びの談話的機能

「ぞ」の係り結びの談話的機能としては、2節に挙げたように、話に区切りをつけるというものが挙げられる。とくに多いのは、歌を挙げたあとに、「とぞいふ」などの形で、区切りをつけるものである。『土佐日記』には、「とぞいふ」などの「ぞ」の係り結びが12例、「とぞ」で終わるものが1例、現れている。例を挙げる。

(14) [歌省略] とぞ言ふなる。(12月27日⑬)

(15) [会話文省略] とぞ言ひ合へなる。(1月1日⑧)

(16) [歌省略] とぞ詠める。(1月7日⑯)

(17) [歌省略] とぞ言へる。(1月11日⑨)

(18) [会話文省略] とぞ言ふ。(1月21日⑨)

一方、「なむ」には、「となむよめる」などの「なむ」の係り結びが3例、「なむ」で終わるものが2例、見られる<sup>(16)</sup>。例を挙げる。

(19) [歌省略] となむ詠める。(1月7日⑳)

(20) [歌省略] と言ひつつなむ。(1月11日⑬)

(21) [歌省略] となむ歌詠める。(1月13日④)

(22) [歌省略] となむ言へる。(2月4日⑥)

(23) [歌省略] となむ。(2月5日⑭)

ほかに、「ぞ」の係り結びは、場面(時間、場所など)の変わり目や、行為や状態などの事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所、あるいは、その逆に、説明や意見、歌などから、事実の描写に変わる箇所、また、前の歌から次の歌に続く箇所など、話の区切りに現れている(その文の後に変わる。後ろの文の初めに、「かかる間に」、「かく」、「かくて」などが来ることが多い)。例を挙げる(「かかる間に」、「かく」、「かくて」に点線を付す)。

○場面(時間、場所など)の変わり目

- (24) ありとある上下、童<sup>かみしも</sup>まで酔<sup>わらは</sup>ひ痴<sup>ゑ</sup>れて、一文字<sup>し</sup>をだに知らぬ者<sup>もの</sup>、しが脚<sup>あし</sup>は十文字<sup>ふ</sup>に踏<sup>ふ</sup>みてぞ遊<sup>あそ</sup>ぶ<sup>(17)</sup>。(12月24日③(最後の文))
- (25) (= (4)) ただ、波<sup>なみ</sup>の白<sup>しろ</sup>きのみぞ見<sup>み</sup>ゆる。かか<sup>あひだ</sup>る間に、人<sup>ひと</sup>の家<sup>いへ</sup>の、「池<sup>いけ</sup>」と名<sup>な</sup>ある所<sup>ところ</sup>より、鯉<sup>こひ</sup>はなく、鰻<sup>うなぎ</sup>より始<sup>はじ</sup>めて、川<sup>かは</sup>のも海<sup>うみ</sup>のも、異物<sup>こともの</sup>ども、長櫃<sup>ながびつ</sup>に担<sup>にな</sup>ひ続<sup>つづ</sup>けて、遣<sup>おこ</sup>せたり。(1月7日④→⑤(海→陸))
- (26) これを見送<sup>みおく</sup>らむとてぞ、この人<sup>ひと</sup>どもは追<sup>お</sup>ひ来<sup>き</sup>ける。か<sup>こ</sup>くて、漕<sup>こ</sup>ぎ行<sup>ゆ</sup>くまにまに、海<sup>うみ</sup>の辺<sup>ほとり</sup>に留<sup>と</sup>まれる人も遠<sup>とほ</sup>くなりぬ。(1月9日⑥→⑦(陸→海))
- (27) (= (7)) まして、女<sup>をむな</sup>は、船底<sup>ふなぞこ</sup>に頭<sup>かしら</sup>を突<sup>つ</sup>き当<sup>あ</sup>てて、音<sup>ね</sup>をのみぞ泣<sup>な</sup>く。か<sup>おも</sup>く思<sup>おも</sup>へば、船子<sup>ふなこ</sup>、楫取<sup>かぢとり</sup>は、舟唄<sup>ふなうた</sup>歌<sup>うた</sup>ひて、何<sup>なに</sup>とも思<sup>おも</sup>へらず。(1月9日⑩→⑳(船底→外))
- (28) (= (8)) ただ、月<sup>つき</sup>を見<sup>み</sup>てぞ、西<sup>にし</sup>東<sup>ひむがし</sup>をば知<sup>し</sup>りける。かか<sup>あ</sup>る間に、みな夜<sup>よ</sup>明<sup>あ</sup>けて、手洗<sup>てあら</sup>ひ、例<sup>れい</sup>の事<sup>こと</sup>どもして、昼<sup>ひる</sup>になりぬ。(1月11日④→⑤(暁→朝・昼))
- (29) それは、「海<sup>うみ</sup>の神<sup>かみ</sup>に怖<sup>お</sup>ぢて」と言<sup>い</sup>ひて、何<sup>なに</sup>の葦<sup>あし</sup>蔭<sup>かげ</sup>に託<sup>ことづ</sup>けて、老海鼠<sup>ほや</sup>のつまの貽<sup>い</sup>鮠<sup>ずし</sup>、鮠<sup>すしあわび</sup>をぞ、心<sup>こころ</sup>にもあらぬ脛<sup>はぎ</sup>に上<sup>あ</sup>げて見<sup>み</sup>せる。(1月13日⑦(最後の文))

## ○事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所

- (30) (= (2)) 守<sup>かみ</sup>の館<sup>たち</sup>の人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>の中に、この来<sup>な</sup>たる人<sup>き</sup>々<sup>びと</sup>ぞ、心<sup>こころ</sup>あるやうには、言<sup>い</sup>はれ仄<sup>ほ</sup>めく。か<sup>わか</sup>く別<sup>がた</sup>れ難<sup>い</sup>く言<sup>い</sup>ひて、か<sup>ひと</sup>の人<sup>びと</sup>々の、口<sup>くちあみ</sup>綱<sup>あみ</sup>も諸<sup>もろ</sup>持<sup>も</sup>ちにて、この海<sup>うみ</sup>辺<sup>べ</sup>にて、担<sup>にな</sup>ひ出<sup>い</sup>だせる歌<sup>うた</sup>、[歌省略] (12月27日⑧→⑨)
- (31) (= (3)) ただ、押鮎<sup>おしあゆ</sup>の口<sup>くち</sup>をのみぞ吸<sup>す</sup>ふ。この吸<sup>す</sup>ふ人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>の口<sup>くち</sup>を、押鮎<sup>おしあゆ</sup>もし思<sup>おも</sup>ふやうあらむや、[会話文省略] (1月1日⑦→⑧)
- (32) 今宵<sup>こよひ</sup>、月<sup>つき</sup>は海<sup>うみ</sup>にぞ入<sup>い</sup>る。これを見<sup>み</sup>て、業平<sup>なりひら</sup>の君<sup>きみ</sup>の「山<sup>やま</sup>の端<sup>は</sup>逃<sup>に</sup>げて入<sup>い</sup>れずもあらなむ」といふ歌<sup>うた</sup>なむ思<sup>おも</sup>ほゆる。(1月8日③→④)

- (33) 本もとごとに波なみ打ち寄よせ、枝えだごとに鶴つるぞ飛とび通かよふ。面白おもしろしと見みるに耐たへずして、船ふなびと人の詠うためる歌、[歌省略] (1月9日⑭→⑮)
- (34) まだ幼をさなき童わらはの言ことなれば、人々ひとびと笑わらふ時ときに、ありける女をむな童わらはなむ、この歌を詠うためる。[歌省略] (1月11日⑧)
- (35) 徒いたづらに日ひを経ふれば、人々ひとびと海うみを眺ながめつつぞある。女めの童わらはの言いへる、[歌省略] (1月15日④→⑤)

○説明や意見、歌などから、事実の描写に変わる箇所

- (36) この、羽根はねといふ所ところ問わらふ童わかしのついでにぞ、また、昔むかしへ人びとを思おもひ出いでて、いづれの時ときにか忘わする。今日けふはまして、母ははの悲かなしがるることは。(1月11日⑪→⑫)
- (37) これを見みれば、春はるの海うみに秋あきの木この葉はしも散ちれるやうにぞありける。麗おほろけの願ねがいによりてにやあらむ、風かぜも吹ふかず、よき日出ひいでて来きて、漕こぎ行く。(1月21日④→⑤)
- (38) [唄省略]と歌うたふぞあはれなる。かく歌うたふを聞ききつつ漕こぎ来くるに、黒鳥くろとりといふ鳥とり、岩いはの上うへに集あつまりをり。(1月21日⑥→⑦)

同様の「なむ」の係り結びの例を挙げる。

○事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所

- (39) これかれ互たがひに、「国くにの境さかひの内うちは」とて、見送みおくりに来くる人数ひとあまた多たが中なかに、藤原ふぢはらのときぎね、橘たちばなのすゑひら、長谷部はせべのゆきまさらなむ、御館みたちより出いで給たまひし日ひより、ここかしこに追おひ来くる。この人々ひとびとぞ、志こころざしある人なりける。(1月9日②→③)
- (40) この間あひだに、雲くもの上うへも海うみの底そこも、同じ如おなくになむありける。むべも昔むかしの男をとこは、「棹さは穿うつ波なみの上うへの月つきを。船ふねは圧おそ海うみの中なかの空そらを。」とは言いひけむ。(1月17日③→④)

○前の歌から次の歌に続く箇所

- (41) [歌省略]となむありければ、帰かへる前まへの守さきの詠かみめりける、[歌省略] (12月26日⑥)

この節の最後に、『土佐日記』の記事の概要・文章の展開・係り結びの出現位置を一覧にしたものを挙げておく（表2）。

表2 『土佐日記』の記事の概要・文章の展開・係り結びの出現位置

【凡例】「文章の展開」における略号や用語は、以下のとおりである。

- ・○数字：各日における各文の順番。
- ・行為：時間的順序に従った、人の行為や状態（の継続）。
  - ・㊦：前国司一行（身内の者）以外の人々の行為（㊦のないものは、前国司一行の行為<sup>(18)</sup>）。
  - ・㊦㊦：前国司一行と、それ以外の者との共同の行為。
- ・状態：時間的順序に従った、天候や自然などの状態。
- ・説明：時間的順序にかかわらずに説明しているもの。
- ・意見：評価・判断・感想など（自由間接言説と思われるものを含む）。
- ・セリフ：会話の言葉そのままと思われるもの。「内話」（心中語）は、セリフとしては扱わない。
- ・歌：和歌（通し番号を付す）。「唄」は舟唄など（通し番号は付さない）。
- ・行為（+意見）：行為の描写の中に意見が現れるもの（他の「+」も同様）。
- ・行為+歌：行為の描写の後に歌が現れるもの（他の「+」も同様）。
- ・（ぞ）：係助詞「ぞ」が現れている箇所（他の係助詞も同様）。
  - ・㊦：文末がその係助詞で終わっているもの。
- ・歌+（ぞ）：歌のあとに「とぞいへる」などとあるもの（他の係助詞も同様）。

～日目	月日	場所	記事の概要	文章の展開
1	12/21	国府→ 大津	日記を書くことにする。 12月21日夜に出発する。 任期を終えた国司が館を出る。多くの人々が見送りに来る。	①説明→ ②行為→③説明→ ④行為→⑤㊦行為→⑥㊦㊦行為 (+意見)(なむ)
2	12/22	大津	和泉国までの無事を祈願する。藤原のときざねが饒別に来る。	①日付+行為→②㊦行為→③㊦㊦行為(+意見)
3	12/23	大津	八木のやすのりが饒別に来る。	①日付→②説明→③説明→④㊦行為(+意見)(ぞ)→⑤説明(+意見)(や・なむ)→⑥説明(+意見)
4	12/24	大津	講師が饒別に来る。	①日付→②㊦行為→③㊦㊦行為(ぞ)
5	12/25	大津→ 国府	新任国司から送別の宴に呼ばれる。	①日付→②㊦行為→③㊦㊦行為(+意見)

6	12/26	国府 → (大津)	送別の宴が続く。	①日付→② <sup>㊦</sup> 行為→③ <sup>㊦</sup> 行為→④ <sup>㊦</sup> 行為→⑤説明→⑥ <sup>㊦</sup> 行為+歌 <sub>1</sub> +(なむ)+行為+歌 <sub>2</sub> →⑦説明(+意見)→⑧ <sup>㊦</sup> 行為(+意見)
7	12/27	大津→  鹿兒の崎  →浦戸	船出する。 この国で急死した女 児を追慕する。  鹿兒の崎で国司の兄 弟らが酒などを持っ てくる。 楫取に促され、船に 乗る。  浦戸に泊まる。藤原 のときざねらが来る。	①日付→②行為→ ③説明→④行為(+意見)(ぞ)→ ⑤行為(+意見)→⑥行為+歌 <sub>3</sub> → ⑦歌 <sub>4</sub> (ぞ)+ <sup>㊦</sup> 行為→⑧行為(+ 意見)(ぞ)→⑨ <sup>㊦</sup> 行為(+意見)+ 歌 <sub>5</sub> (や・こそ)+行為+歌 <sub>6</sub> → ⑩ <sup>㊦</sup> 行為(+意見)+セリフ+セ リフ+行為→⑪行為(+意見)→ ⑫行為→⑬行為+セリフ+(ぞ) → ⑭行為→⑮ <sup>㊦</sup> 行為
8	12/28	浦戸 → (大湊)	浦戸から大湊へ向か う。 以前の国司の子らが 酒などを持ってくる。	①日付→②行為→  ③ <sup>㊦</sup> 行為→④行為
9	12/29	大湊	大湊に泊まる。 医師が、屠蘇、白散、 酒を持ってくる。	①日付→②行為→ ③ <sup>㊦</sup> 行為→④意見
10	1/1	大湊	同じ泊にいる。 白散を失う。押鮎を 吸う。	①日付→②行為→ ③説明→④説明→⑤説明→⑥説 明→⑦行為(ぞ)→⑧意見(や <sup>㊦</sup> ) +セリフ(ぞ)+セリフ(ぞ <sup>㊦</sup> ) (ぞ)
11	1/2	大湊	大湊にいる。 講師が酒などを贈っ てくる。	①日付→②行為→ ③ <sup>㊦</sup> 行為
12	1/3	大湊	同じ所にいる。 風波が強い。	①日付→②行為→ ③意見(や)
13	1/4	大湊	風が吹き、出発でき ない。 まさつらが酒などを 持って来る。	①日付→②状態+行為→  ③ <sup>㊦</sup> 行為→④行為(+意見)→⑤ 説明→⑥意見



14	1/5	大湊	風波がやまず、同じ所にいる。 人々が訪ねてくる。	①日付→②状態+行為→ ③行為
15	1/6	大湊	同じ所にいる。	①日付→②行為
16	1/7	大湊	同じ港にいる。 白馬の節会を思う。 「池」に住む人が長櫃で食べ物を贈ってくる。 わりごを持ってきた人が歌を詠むが、だれも返歌をしない。 ある童が返歌をしようと言う。	①日付→②行為→ ③意見→④説明(ぞ)→ ⑤行為→⑥説明(ぞ)→⑦説明→ ⑧歌 <sub>7</sub> →⑨意見→⑩説明→⑪説明→ ⑫行為(+意見)→ ⑬説明→⑭説明(+意見)(ぞ・や)→ ⑮説明(+意見)→⑯行為+歌 <sub>8</sub> (や)+(ぞ)→ ⑰説明(+意見)→⑱意見→⑲行為→ ⑳行為(+意見)→㉑行為+セリフ→ ㉒行為→㉓セリフ+行為→ ㉔行為+セリフ(やは)+セリフ→ ㉕セリフ+行為+行為(+意見)(や)→ ㉖セリフ+行為(+意見)→ ㉗行為→㉘行為+歌 <sub>9</sub> (こそ)+(なむ)→ ㉙意見→㉚意見(や)→ ㉛セリフ(かは)+セリフ+セリフ+行為
17	1/8	大湊	障りがあり、同じ港にいる。 月を見て、業平の歌を思う。	①日付→②行為→ ③状態(ぞ)→④意見(なむ)→⑤意見(や)→ ⑥行為(+意見)+歌 <sub>10</sub> (や)
18	1/9	大湊 → (宇田の松原)→	大湊から奈半へ向かう。 藤原のときざねらが追ってくる。互いに別れを惜しむ。  宇多の松原を過ぎる。	①日付+行為→ ②行為(なむ)→③意見(ぞ)→ ④意見→⑤行為→⑥説明(ぞ)→ ⑦行為→⑧行為→⑨意見→ ⑩意見→⑪行為+歌 <sub>11</sub> (や)→ ⑫行為→⑬意見→⑭状態(ぞ)→ ⑮行為(+意見)+歌 <sub>12</sub> (ぞ)+(や)→ ⑯意見→

		奈半	楫取の舟唄を聞く。 泊に着く。	⑰行為+状態+行為→⑱説明(+意見)→⑲説明(ぞ)→⑳㉔行為(+意見)→㉑㉔行為+唄(ぞ・や・や)→㉒説明→㉓行為+意見→ ㉔行為
19	1/10	奈半	奈半に泊まる。	①日付→②行為
20	1/11	奈半→ (羽根)  →(室津)	暁に船を出し、室津に向かう。 「羽根」に来る。童が「羽根」という名をおもしろがる。それを見て、亡き子を思い出す。	①日付→②行為→③行為→④行為(ぞ)→⑤行為→ ⑥行為→⑦行為+セリフ(や)→ ⑧行為(なむ)→⑨歌 <sub>13</sub> +(ぞ)→ ⑩説明(+意見)→⑪意見(ぞ・か)→⑫行為(+意見)→⑬行為(+古歌一部(ぞ))(+意見)+ 歌 <sub>14</sub> +(なむ)㉔
21	1/12	室津	ふむときらの船が奈良志津より室津に来る。	①日付→②状態→③㉔行為
22	1/13	室津	女たちが沐浴しに下りていく。 女が葦蔭で沐浴する。	①日付+状態→②状態→③行為→④行為+歌 <sub>15</sub> (ぞ・か)+(なむ)→ ⑤意見→⑥説明→⑦行為(+意見)(ぞ)
23	1/14	室津	雨が降り、同じ所にいる。 船君が節忌をする。 楫取が鯛を持ってきて、米や酒を与える。	①日付→②状態+行為→ ③行為→④行為→⑤説明→⑥㉔行為→⑦行為→⑧説明(+意見)
24	1/15	室津	船が進まないことを嘆く。 女の童が歌を詠む。	①日付→②行為→③説明(+意見)(ぞ)→④説明(+意見)(ぞ)→ ⑤行為+歌 <sub>16</sub> (や)→⑥意見
25	1/16	室津	風波がやむことを願う。 船に乗ってから25日になる。	①日付→②状態→③意見(なむ)(+内話(か))→④状態→⑤行為+歌 <sub>17</sub> (ぞ・ぞ)→ ⑥説明



31	1/22	某港 a →  (某港 b)	昨日の泊から別の泊 に向かう。 男の童が山を見て、 歌を詠む。  ある人が歌を詠む。	①日付→②行為→  ③状態→④説明(ぞ)→⑤行為 (+意見)(ぞ)→⑥歌 <sub>26</sub> (や)+(ぞ) →⑦意見→ ⑧状態(+意見)→⑨行為+歌 <sub>27</sub>
32	1/23	某港 b	海賊の恐れありと聞 き、神仏を祈る。	①日付→②状態→③行為
33	1/24	某港 b	同じ所にいる。	①日付→②行為
34	1/25	某港 b	船を出さない。海賊 が来るといううわさ を聞く。	①日付→②行為+セリフ→③ 行為
35	1/26	某港 b →  (某港 c)	海賊を恐れて、夜中 に船を出す。幣を奉 る。 船に帆を上げて進む。	①日付→②行為(+意見)(や)→ ③行為+セリフ+行為→④行 為+歌 <sub>28</sub> +(ぞ)→ ⑤行為→⑥行為(+意見)(か・ や)→⑦行為+歌 <sub>29</sub> (こそ)+(ぞ Ⓢ)→⑧行為
36	1/27	某港 c	風波が荒れて、船を 出さない。 ある女、ある男が歌 を詠む。	①日付→②状態+行為→  ③行為→④行為+歌 <sub>30</sub> →⑤行為 +歌 <sub>31</sub> →⑥状態→⑦行為
37	1/28	某港 c	雨がやまない。	①日付→②状態
38	1/29	某港 c →  土佐の泊	船を出して、漕いで いく。 京の子の日のことを 思い出す。  土佐の泊に船を寄せ る。	①日付→②行為→③行為→④行 為→ ⑤行為+意見→⑥行為+歌 <sub>32</sub> (か) +(ぞ)→⑦意見→⑧行為+歌 <sub>33</sub> →⑨行為→ ⑩行為(+意見)+セリフ(や)+ 行為+セリフ+行為→⑪説明 →⑫行為+セリフ(ぞ)+セリフ +歌 <sub>34</sub> (ぞ)+(ぞ)
39	1/30	土佐の泊 → (沼島など) →和泉の灘 a	夜中に船を出して、 阿波の水門を渡り、 沼島を過ぎ、多奈川 を渡り、和泉の灘に 至る。	①日付→②状態→③行為→④行 為→⑤行為→⑥行為(+意見)→

			船に乗ってから39日になる。和泉の国に来たので、海賊の心配はない。	⑦状態→⑧意見→⑨説明→⑩行為+意見
40	2/1	和泉の灘 a → (黒崎) → 箱の浦→  (和泉の灘 b)	和泉の灘を出て、漕いでいく。 黒崎の松原を通る。 箱の浦より船を綱で引く。船君が長旅の苦しさを嘆く。  風波が高くなり、留まる。	①日付→②状態→③行為→④→状態 ⑤行為→⑥説明(+意見)(ぞ)→ ⑦行為→⑧行為+歌 <sub>35</sub> (か)→⑨行為+セリフ+行為+歌 <sub>36</sub> →⑩意見→⑪セリフ+セリフ(こそ)+行為→ ⑫状態+行為
41	2/2	和泉の灘 b	風波がやまず、神仏を祈る。	①日付→②状態→③行為
42	2/3	和泉の灘 b	船を出さない。 風波がやまず、歌を詠む。 日が暮れる。	①日付→②状態+行為→ ③状態→④行為+歌 <sub>37</sub> →  ⑤状態
43	2/4	和泉の灘 b	楫取が黒雲を見て船を出さない。終日波風は立たない。 この浜で美しい貝や石を見て、亡き子を思い、歌を詠む。 女が歌を詠む。	①日付→②セリフ+⑧行為→③状態→④意見→  ⑤状態→⑥行為+歌 <sub>38</sub> +行為+歌 <sub>39</sub> +(なむ)→⑦意見→⑧意見(や⑧)→⑨意見→ ⑩行為+歌 <sub>40</sub> (ぞ)
44	2/5	和泉の灘 b → (小津) →  (石津) →  (住吉) →	和泉の灘より小津に向かう。 小津の松原を見て、歌を詠む。 船を速く漕ぐように促すと、楫取は歌のようなことばを言う。 風波立たずに進む。  住吉のあたりを漕いでいく。 亡き子の母が歌を詠む。	①日付→②行為(+意見)→ ③状態→④行為+歌 <sub>41</sub> →  ⑤行為+セリフ+セリフ+⑧行為+セリフ+セリフ→⑥説明→ ⑦説明→⑧説明(+意見)→⑨行為+状態→⑩状態→⑪行為+歌 <sub>42</sub> +行為+状態(+意見)→ ⑫行為→⑬行為+歌 <sub>43</sub> (ぞ)→ ⑭行為+歌 <sub>44</sub> (や)+(なむ⑮)→ ⑮説明→

		(澁標)	風が吹き、楫取が住吉明神に物を奉るように言う。海に鏡を入れると、海は穏やかになる。	⑩行為+状態→⑪ <sup>㊸</sup> 行為+セリフ(ぞ)+セリフ(ぞ)+意見→⑫セリフ+ <sup>㊸</sup> 行為→⑬行為→⑭状態+ <sup>㊸</sup> 行為+セリフ+セリフ→⑮行為+意見+セリフ(こそ)+行為+意見→⑯状態+行為+歌 <sub>45</sub> →⑰意見→⑱意見(こそ)→⑲意見
45	2/6	澁標→難波→川尻	澁標のところより出て、難波に着き、川尻に入る。船酔いの淡路の大御が歌を詠む。	①日付→②行為→③行為→④行為(ぞ)+歌 <sub>46</sub> (か)→⑤行為→⑥行為+セリフ
46	2/7	川尻→  (某所)	川尻に入るが、船が進まない。病人の船君が淡路の御に対抗して、歌を詠む。	①日付→②行為→③説明→ ④説明→⑤行為(や)→⑥歌 <sub>47</sub> →⑦説明(+意見)→⑧行為+歌 <sub>48</sub> →⑨説明(+意見)→⑩セリフ+セリフ+行為
47	2/8	某所→鳥飼の御牧	鳥飼の御牧のあたりに泊まる。 ある人が贈り物を持ってくる。米でお返しをする。	①日付→②行為→ ③行為→④ <sup>㊸</sup> 行為→⑤行為→⑥行為+セリフ+(や <sup>㊸</sup> )→⑦説明→⑧行為
48	2/9	鳥飼の御牧→ わだの泊のあかれの所→ (渚の院)→  鵜殿	船を引いて上るが進まない。 わだの泊のあかれの所で米や酒を与える。 渚の院を見て、在原業平を偲び、歌を詠む。  子を抱く人々を見て、亡き子の母が悲しみに耐えず、歌を詠んで泣く。 鵜殿に泊まる。	①日付→②行為(+意見)(ぞ)→ ③説明→④ <sup>㊸</sup> 行為+行為→ ⑤行為→⑥意見→⑦状態→⑧状態→⑨行為+セリフ+セリフ+歌 <sub>49</sub> +セリフ→⑩行為+歌 <sub>50</sub> →⑪行為+歌 <sub>51</sub> (ぞ)+行為(+意見)(ぞ)→ ⑫説明(ぞ)→⑬行為→⑭行為+歌 <sub>52</sub> +行為(ぞ)→⑮意見→⑯意見→⑰説明(か)→ ⑱行為

49	2/10	鵜殿	障ることがあって、 上らない。	①日付→②行為
50	2/11	鵜殿→ (八幡宮) →山崎	雨が降って、やむ。 八幡宮を拜む。山崎 に至る。	①日付→②状態 ③行為+④行為→④行為→ ⑤行為→⑥意見→⑦行為→⑧状態 →⑨行為+歌 <sub>53</sub> (か・ぞ)
51	2/12	山崎	山崎に泊まる。	①日付→②行為
52	2/13	山崎	山崎にいる。	①日付→②行為
53	2/14	山崎	京に車を取りに行か せる。	①日付→②状態→③行為
54	2/15	山崎	車が来る。人の家に 移る。 家の主人が饗応して くれる。	①日付→②行為→③行為(+意 見)→ ④⑤行為(+意見)→⑤意見→⑥ 行為→⑦意見
55	2/16	山崎→  島坂  →桂川→京   自宅	夕方、京に上る。  島坂で、ある人が饗 応してくれる。 桂川で月を見て歌を 詠む。  家に着き、門を入ると、 ひどく荒れている。家 を預けた隣人の心も荒 れているのだ。 池や松も荒れている。 泣き子を思い、心知 れる人と歌を詠む。  口惜しいことは尽き ない。 早く破り捨ててしま おう。	①日付→②行為→③行為(+意 見)→④説明(セリフ(ぞ))(+ 意見)(ぞ)→ ⑤行為+⑥行為→⑥意見→⑦意 見(ぞ)→⑧行為→ ⑨行為+状態→⑩行為(ぞ)→⑪ 行為+セリフ+行為+歌 <sub>54</sub> →⑫ 行為+歌 <sub>55</sub> →⑬行為→⑭歌 <sub>56</sub> →⑮説明(+意見)(ぞ)→ ⑯状態→⑰意見→⑱行為→⑲状 態(+意見)(ぞ)→⑳意見→㉑説 明(こそ)→㉒説明→㉓行為→㉔ 意見→ ⑵状態→⑶説明→⑷説明(+意 見)(や)→⑸説明(ぞ)→⑹状態+ 行為(ぞ)→⑺意見→⑻行為→⑼ 行為(+意見)+歌 <sub>57</sub> +(ぞ)→⑿意 見(や・なむ⑽)→⑿歌 <sub>58</sub> (や⑾)→ ⑽意見→ ⑿意見

#### 4. 係り結びと古典読解

『土佐日記』の中で、古典の学習でよく取り上げられるのは、12月21日（門出）、2月4日（忘れ貝）、2月16日（帰京）の記事である（とくに、「門出」と「帰京」は、国語総合の教科書でよく取り上げられている）。そこで、最後に、これらの日の記事における係り結びについて、見ておきたい。

【12月21日（門出）】

《本文》

①男をとこもすなる日記といふものを、女をんなもしてみむとてするなり。②その年の十二月の二十日あまり一日の日の、戌いぬの刻ときに、門出かどです。③その由よし、いささかに、ものかに書きつく。④ある人、県あがたの四年五年果はてて、例れいの事ことども皆みなし終をへて、解由げゆなど取りとりて、住すむ館たちより出いでて、船ふねに乗のるべき所ところへ渡わたる。⑤かれこれ、知しる知しらぬ、送おくりす。⑥年来としごろよく比くらべつる人々ひとびとなむ、別わかれ難がたく思おもひて、日しき頻しばしばりに、とかくしつづ、罵ののしるうちに、夜更よふけぬ。

《文章の展開》

①説明→②行為→③説明→④行為→⑤行為→⑥行為（+意見）（「…なむ…」）

これは、最初の日である、12月21日の記事であるが、区切れとなる最後の文に「なむ」の係り結びが使われている。この文中の「忘れ難く思ひて」は、第三者（「年来よく比べつる人々」）の気持ちとして描かれており、自由間接言説的な表現になっている（《文章展開》では、「+意見」で示した）。

【2月4日（忘れ貝）】

《本文》



①四日。②楫取<sup>かぢとり</sup>、「今日<sup>けふ</sup>、風雲<sup>かぜくも</sup>の気色<sup>けしき</sup>はなはだ悪<sup>あ</sup>し。」と言<sup>い</sup>ひて、船出<sup>ふねい</sup>ださずなりぬ。③しかれども、ひねもすに波風<sup>なみかぜ</sup>立たず。④この楫取<sup>かぢとり</sup>は、日<sup>ひ</sup>もえ計<sup>はか</sup>らぬ乞<sup>かたる</sup>丐<sup>とまり</sup>なりけり。⑤この泊<sup>はま</sup>の浜<sup>くさぐさ</sup>には、種<sup>うろ</sup>々の美<sup>うろ</sup>わしき貝<sup>かひ</sup>、石<sup>いし</sup>など多<sup>おほ</sup>かり。⑥かかれば、た<sup>むかし</sup>だ昔<sup>ひと</sup>の人<sup>こ</sup>をのみ恋<sup>こころ</sup>ひつつ、船<sup>ふね</sup>なる人<sup>ひと</sup>の詠<sup>よ</sup>める、『寄<sup>よ</sup>する波<sup>なみ</sup>打ちも寄<sup>よ</sup>せなむわが恋<sup>こ</sup>ふる人<sup>ひと</sup>忘れ貝<sup>かひ</sup>下<sup>くだ</sup>りて拾<sup>ひろ</sup>はむ』と言<sup>い</sup>へれば、ある人<sup>ひと</sup>の耐<sup>た</sup>へずして、船<sup>ふね</sup>の心<sup>こころ</sup>遣<sup>や</sup>りに詠<sup>よ</sup>める、『忘れ貝<sup>わす</sup>拾<sup>がひ</sup>ひろひしもせじ白玉<sup>しらたま</sup>を恋<sup>こ</sup>ふるをだにも形<sup>かた</sup>見<sup>み</sup>と思<sup>おも</sup>はむ』と<sup>い</sup>なむ言<sup>い</sup>へる。⑦女子<sup>をむな</sup>のためには、親<sup>おや</sup>幼<sup>おきな</sup>くなりぬべし。⑧「玉<sup>たま</sup>ならずもありけむを」と人<sup>ひと</sup>言<sup>い</sup>はむや。⑨されども、「死<sup>し</sup>し子<sup>こ</sup>、顔<sup>かほ</sup>良<sup>よ</sup>かりき」と言<sup>い</sup>ふやうもあり。⑩なほ、同<sup>おな</sup>じ所<sup>ところ</sup>に日<sup>ひ</sup>を<sup>ふ</sup>経<sup>こと</sup>る事<sup>なげ</sup>を嘆<sup>なげ</sup>きて、ある女<sup>をむな</sup>の詠<sup>よ</sup>める歌<sup>うた</sup>、『手<sup>て</sup>を漬<sup>ひ</sup>てて寒<sup>さむ</sup>さも知らぬ泉<sup>し</sup>にぞ<sup>いづみ</sup>汲<sup>く</sup>むとはなしに日<sup>ひ</sup>ごろ経<sup>へ</sup>にける』

## 《文章の展開》

①日付→②セリフ＋行為→③状態→④意見→⑤状態→⑥行為＋歌＋行為＋歌＋行為（「…なむ…」）→⑦意見→⑧意見（「…や」）→⑨意見→⑩行為＋歌（「…ぞ…」）

これは、2月4日の記事であるが、係り結びは、地の文に「なむ」と「や」のものが、歌に「ぞ」のものが現れている。このうちの「なむ」のものについては、「船なる人」と「ある人」との描写と歌が続いたあとに、「となむ言へる」で、歌の終わりを示している。これは、また、⑦以下の意見を述べる箇所に移る前の位置であり、話の切れ目を示すものとなっている。

【2月16日（帰京）】

## 《本文》

①十六日。②今日<sup>けふ</sup>の夜<sup>よ</sup>さつ方<sup>かた</sup>、京<sup>かの</sup>へ上<sup>のぼ</sup>る。③ついでに見<sup>み</sup>れば、山崎<sup>やまざき</sup>の小櫃<sup>こひつ</sup>の絵<sup>ゑ</sup>も、曲<sup>まが</sup>りの大<sup>おほ</sup>釣<sup>づ</sup>の像<sup>かた</sup>も変<sup>か</sup>はらざりけり<sup>(19)</sup>。④「売<sup>う</sup>り人<sup>びと</sup>の心<sup>こころ</sup>をぞ<sup>し</sup>知らぬ」とぞ<sup>い</sup>言<sup>い</sup>ふなる。⑤かくて、京<sup>し</sup>へ行<sup>い</sup>く<sup>ま</sup>に、島坂<sup>しまさか</sup>にて、人<sup>ひと</sup>、

あるじ 饗応したり。⑥ 必ずしもあるまじき業なり。⑦ 発ちて行きしよりは、  
 くる時ぞ、人はとかくありける。⑧ これにも返り事す。⑨ 夜になし  
 て、京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。⑩ 桂  
 川、月の明きにぞ渡る。⑪ 人々の言はく、「この川、飛鳥川にあらね  
 ば、淵瀬さらに変はらざりけり」と言ひて、ある人の詠める歌、『ひ  
 さかたの月に生ひたる桂川底なる影も変はらざりけり』⑫ また、あ  
 る人の言へる、『雨雲の遥かなりつる桂川袖を漬ても渡りぬるか  
 な』⑬ また、ある人詠めり。⑭ 『桂川我が心にも通はねど同じ深さ  
 に流るべらなり』⑮ 京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。⑯ 夜  
 更けて来れば、所々も見えず。⑰ 京に入りたちて嬉し。⑱ 家に到り  
 て、門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。⑲ 聞きしよりもま  
 して、言ふ甲斐なくぞ毀れ破れたる。⑳ 家に、預けたりつる人の心  
 も、荒れたるなりけり。㉑ 中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望み  
 て預かれるなり。㉒ さるは、便りごとに、物も絶えず得させたり。㉓  
 今宵、「かかること」と、声高にもものも言はず。㉔ いとは辛く見ゆ  
 れど、志はせむとす。㉕ さて、池めいて窪まり、水浸ける所あ  
 り。㉖ ほとりに松もありき。㉗ 五年六年のうちに、千年や過ぎにけ  
 む、片方はなくなりにけり。㉘ 今生ひたるぞ交じれる。㉙ 大方の皆荒  
 れにたれば、「あはれ」とぞ人々言ふ。㉚ 思ひ出でぬことなく、思ひ  
 恋しきが中に、この家にて生まれし女子の、諸共に帰らねば、いか  
 がは悲しき。㉛ 船人も皆、子集りて罵る。㉜ かかるうちに、なほ悲  
 しきに耐へずして、密かに心知れる人と言へりける歌、『生まれしも  
 帰らぬものを我が宿に小松のあるを見るが悲しき』とぞ言へる。㉝ な  
 ほ飽かずやあらむ、また、かくなむ。㉞ 『見し人の松の千年に見まし  
 かば遠く悲しき別れせましや』㉟ 忘れ難く、口惜きこと多かれど、え  
 つ尽くさず。㊱ とまれかうまれ、疾く破りてむ。

《文章の展開》

①日付→②行為→③行為（+意見）→④説明（セリフ（「…ぞ…」）（+意見）（「…ぞ…」）→⑤行為+行為→⑥意見→⑦意見（「…ぞ…」）→⑧行為→⑨行為+状態→⑩行為（「…ぞ…」）→⑪行為+セリフ+行為+歌→⑫行為+歌→⑬行為→⑭歌→⑮説明（+意見）（「…ぞ…」）→⑯状態→⑰意見→⑱行為→⑲状態（+意見）（「…ぞ…」）→⑳意見→㉑説明（「…こそ…」）→㉒説明→㉓行為→㉔意見→㉕状態→㉖説明→㉗説明（+意見）（「…や…」）→㉘説明（「…ぞ…」）→㉙状態+行為（「…ぞ…」）→㉚意見→㉛行為→㉜行為（+意見）+歌+行為（「…ぞ…」）→㉝意見（「…や…，…なむ」）→㉞歌（「…や」）→㉟意見→㊱意見

これは、最後の日、2月16日の記事であるが、この日記の中で最も長く、最も文の数が多い記事である。係り結びも多く現れているが、とくに地の文における「ぞ」のことが多い。「ぞ」の係り結びの現れているところは、場面（場所）の変わり目（④、⑮）や、行為や状態などの事実の描写から、説明や意見、歌などに変わる箇所（⑩、⑲、⑲）、あるいは、その逆に、説明や意見、歌などから、事実の描写に変わる箇所（⑦、⑲）、また、前の歌から次の歌に続く箇所（㉜）などである（いずれかに決めがたいものもあるが、大まかに分けておく）。この日の記事は、（内容、あるいは（および）作者の感慨の吐露が多いためであろうが）係り結びが多すぎて、その役割がわかりにくくなっているように思われる。

以上、本稿では、『土佐日記』を題材に、文章中における係り結びの役割を見てきた。このように、係り結びに注目しながら作品を読むというやり方は、古典学習における読解の方法として有効であると思われる。

《注》

- (1) 『土佐日記』は、「現存する伝本がすべて『土左日記』という表記」（東原・ウォーラー2013: 13）だというのが、本稿では、今日一般的な表記である『土佐日記』を用いておく。ただし、引用の中では、『土左日記』の表記も用いる。
- (2) 文語文法が平安時代の文法に基づくことについて、白藤（1987: 2）は、「書き言葉という点から見ると、それぞれの時代に書き言葉はあるのであるが、[中略]長い時代に亘って、ある種の文体の文が、伝統的・慣習的に行われていたのであり、その内容が、和文脈・漢文訓読脈の両者を含めて、平安時代の文章の調子を基礎とするものであり、[中略]文語文法の内容は、自ずとある種のもを事実として指していたのである。」と述べている。
- (3) 「述定」と「伝達」とは、芳賀綏の用語で、前者は、「事柄の内容についての、話手の態度【断定・推量・疑い・決意・感動・詠歎……など】の言い定め」、後者は、「事柄の内容や、話手の態度を、聞手（時には話手自身）に向ってもちかけ、伝達する言語表示」、「すなわち【告知・反応を求める・誘い・命令・呼びかけ・応答……など】」を表す（芳賀1978: 298, 森野1987: 106）。
- (4) 伊牟田（1981: 69）によれば、「蜻蛉日記の地の文にはナムが二六例（うち上巻に一三例）見えるが、そのうち二二例（うち上巻一〇例）は一つの話題（文段）のしめくり（または初め）に用いられたもの」だという。
- (5) 川村力雄編著（2004）『改訂版 実戦演習 標準 古文』桐原書店 p. 40～p. 41, 「解説・解答書」p. 38～p. 39。ほかに、同問題集には、『徒然草』の「あだし野露きゆる時なく」の「段落分け」の問題などもあり（p. 36～p. 37, 「解説・解答書」p. 34～p. 35）、そこでも、係り結び（「…こそ…」）が段落の切れ目に現れている。なお、同問題集の「解説・解答書」には、「段落分け」について、「時・場所・人物・話題の変化に注目。」（p. 37）とある。
- (6) 『新注校訂 土左日記』（武蔵野書院）、『新編 土左日記』（おうふう）によるが、両書に相違があるときは、主に前者による（一部後者による）。文の認定については、長田（1964: 12）の「『文』とは、活字本の上で、普通の場合、句点から句点までの地の文をさし、特別の場合、たとえば、歌の場合には、句点の次から歌で終止している場合、歌の最後までをさす。」にならう（長田1964では、テキストに、日本古典文学大系の『土左日記』（鈴木知太郎校注）を用いている。長田1964: 13は、「『文』の認定をほとんど鈴木氏に従ったことは、その意味で、『文』の解釈の出発点を、まず、鈴木氏に従おうとしたことである。」と述べている）。本稿では、文の認定に、

『新注校訂 土左日記』と『新編 土左日記』とを用いるが、両者に相違がある（解釈が異なる）、12月27日の「かくあるうちに京にてうまれたりしをむなこくに、てにはかにうせにしかはこのころのいたちいそきをみれとなにこともいはず京へかへるにをむなこのなきのみそかなしひこふる」、1月11日の「けふはましては、のかなしかるゝことは」、2月16日の「けふのようさつかた京へのほる」（以上、本文は青谿書屋本の原文による）については、いずれも、ここに引用したものを1文とした）。

- (7) 池田 (1941a: 280-281) で修正された16箇所、萩谷 (1988: 1) による、藤原為家本との照合によって明らかになった青谿書屋本の独自の誤写4箇所（うち、2箇所は池田 1941a の修正と重なる）のほか、『新編日本古典文学全集 13』（小学館）の「校訂付記」によって、5箇所を改め、また、「え（ヤ行）→へ」の誤写と思われる（池田 1941a: 151-152）13箇所を改めた。
- (8) 主な注釈書の解説で、主題やモチーフとされているものを挙げると、「土佐で失った女兒に対する親としての情」（松村 1973: 12）、「京に生まれ、しかも土佐離国の直前に異郷で急死した愛児への永遠の思慕」（鈴木 1979: 150）、「僻遠の地からの帰京の旅」（菊池 1995: 76）、「旅」（木村 1988: 364）、「土佐守在任中およびその往還時の体験に触発された自身の感慨を『旅の時間』の中で表現すること」、「都びと意識や流人意識、また死・老いへの感慨」、「氏族意識」（長谷川 1989: 502, 505）などがある。
- (9) 木村 (1979: 98, 105) は、「『土佐日記』の主題を一つに限定できないことは、よく言われるとおりである。」とし、「特定の主題にしばられることなく、さまざまな意識や発想が継起的につながったり、表裏をなしたり、矛盾しあったりしながら、総体として作品全体を貫之の複雑な内面像としていくのが、『土佐日記』の本質と考えるべきなのであろう。」と述べている。また、萩谷 (2000: 17) は、「表層第一主題 = 歌論展開／中層第二主題 = 社会風刺／深層第三主題 = 自己反照／という三大主題を並行させた、極めて多目的で、複雑多岐な内容を包含した作品である。」（／は改行）としている。萩谷は、このうちの「表層第一主題」について、「年少男子に対する和歌初学の入門書（その歌論展開）」としているが、大伴 (1999: 5) は、「これは、私が見たところでは、当時の初心者に歌や古典常識を教えるために作られた教科書という性質の作品」で、「しかも、私は、権門の女子で将来の後候補のために書かれたものだと思います」と述べている。
- (10) 木村 (1979: 68) によれば、「女文字」説は江戸時代からあったようである。
- (11) 東原・ウォーラー (2013: 18) は、「『土左日記』という散文作品の主体は

分裂している、そのことを冷静に意識し、むしろ分裂していることを積極的に評価できる分析をすべきではないだろうか。」と述べている。堀江(2016)の『土左日記』(訳)では、本文(訳)の前に「貫之による緒言」をおき、「私は男にもなり、女にもなる。男の『私』にもなり、女の『私』にもなる。」と、貫之に語らせている。

- (12) 「自由間接言説」(free indirect discourse)とは、「任意の登場人物の発話・思考を再現する言説の類型の一つ」であり、これには、「自由間接話法」(free indirect speech) (英文法でいう「中間話法」と、「自由間接思考」(free indirect thought) が含まれ(『物語論辞典 改訂版』「free indirect discourse」)、「語りの文でありながらキャラクターの意識をキャラクター自身の視点で提示することを可能にする」(『最新文学批評用語辞典』「自由間接話法」)、「語り手が作中人物の言説を引き受ける、というかむしろ、作中人物が語り手の声によって話す」(ジュネット 1985: 203)ものである。
- (13) 係助詞の認定は、『土左日記総索引』、『土佐日記：本文及び索引』による。ただし、『新編日本古典文学全集13』(小学館)の「校訂付記」に従って、両索引にある「ぞ」を1つ除いた(青谿書屋本の「ゝ [は] ちすそなむ」(12月23日)の「そ」を「に」に改めた)。両索引の内容は、ほぼ同じであるが、係助詞「や」の数が異なる。前者では、本稿同様、34としているのに対し、後者では35としている。これは、後者では、青谿書屋本をそのまま本文としていて、青谿書屋本独自の誤写とされる(萩谷 1988: 1)、2月1日の「つなてや」(為家本「つなての」)の「や」を含めているためである。
- (14) 伊牟田(1981: 54, 62)によると、「一般に、日記にはゾが多く、古い物語はナムが多く、時代が下るとコソが多い、という傾向が見られる。[中略]土佐日記はゾが極めて多くコソが極めて少ない」、「日記にゾが多いのは、[中略]自照的表现にふさわしいものであったからだ」という。
- (15) 「ぞ」に見られる2種の強調は、半藤(2003: 14)の述べる、「こそ」の2つの「取り立て」機能(「有限特定のものの中からの取り立て」(対比用法)と、「絶対的な取り立て」(主題用法(または主題的用法))に近いと思われる。
- (16) 木下(1992: 20)の調査によると、平安仮名文学9作品(『竹取物語』、『伊勢物語』、『土左日記』、『平中物語』、『大和物語』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』、『堤中納言物語』)について、『「とぞ」『などぞ』の用例数』と『「となむ」『などなむ』の用例数』とを比べると、『「なむ』の場合のほうがむしろ『と』『など』を承けた形での引用は多い。」という。

- (17) 「一文字たにしらぬものしかあしは十文字にふみて」（青谿書屋本の原文）の「しか」については、諸説あるが、ここでは小松（1960: 95-96）に従い、「…者、しが足を…」と読点を打っておく。
- (18) 「船の一行は旅の哀歎を分けあう共同体を形成し、殆ど一体化している。」（篠原 1987: 178）などとされるため、表2では、前国司一行の行為と、それ以外の人々の行為とを区別して示すことにする。
- (19) 「やまさきのこひつのゑもまかりのおほちのかたもかはらさりけり」（青谿書屋本の原文）は、「土佐日記の中で代表的な難文」（萩谷 1960: 110）、「この作品中でもっとも難解の箇所」（品川 1983: 263-264）などとされるが、ここでは、萩谷（1960: 110-111）の説（対照法解釈）に従って、漢字を当てておく。

#### 引用文献・参考文献（本文・注・訳・索引）

- 池田亀鑑（1941b）『古典の批判的処置に関する研究 第三部 資料・年表・索引』岩波書店
- 大伴凡人（田村秀行）（1999）『姫様と紀貫之のおしゃべりしながら 土佐日記』洋泉社
- 菊地靖彦校注・訳（1995）『土佐日記』『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』小学館
- 木村正中校注（1988）『新潮日本古典集成 80 土佐日記・貫之集』新潮社（新装版 2018）
- 品川和子全訳注（1983）『土佐日記』（講談社学術文庫）講談社
- 鈴木知太郎校注（1957）『土佐日記』『日本古典文学大系 20 土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』岩波書店
- 鈴木知太郎・山田瑩徹編著（1975）『新注校訂 土左日記（影印本）』武蔵野書院
- 鈴木知太郎校注（1979）『土佐日記』（岩波文庫）岩波書店
- 西山秀人編（2007）『土佐日記』（ビギナーズ・クラシックス 日本の古典）角川学芸出版
- 日栄社編修所編（1964）『要説 土佐日記』日栄社
- 日本大学文学部国文学研究室編（1967）『土左日記総索引』日本大学文学部人文科学研究所
- 萩谷朴（1967）『土佐日記全注釈』角川書店
- 萩谷朴（1989）『影印本 土左日記 新訂版』新典社（初版 1968）
- 長谷川政春校注（1989）『土佐日記』『新日本古典文学大系 24 土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』岩波書店

- 林望 (2005) 『すらすら読める 土佐日記』 講談社  
東原伸明, ローレン・ウォーラー編 (2013) 『新編 土佐日記』 おうふう  
平林文雄編著 (1975) 『土佐日記: 本文及び索引』 白帝社  
堀江敏幸訳 (2016) 『土佐日記』 池澤夏樹編 『日本文学全集 3 竹取物語 伊勢物語 埴中納言物語 土佐日記 更級日記』 河出書房新社  
松村誠一校注・訳 (1973) 『土佐日記』 『日本古典文学全集 9 土佐日記 蜻蛉日記』 小学館  
三谷栄一訳註 (1980) 『土佐日記 附現代語訳』 (角川古典文庫) 角川書店  
村瀬敏夫解題 (1992) 『東海大学蔵 桃山文庫影印叢書 第九卷 土佐日記・紫式部日記』 東海大学出版会

#### 引用文献・参考文献 (その他)

- 阿久澤忠 (2002) 『語法・語彙を中心とする平安時代仮名文論考』 武蔵野書院  
阿久津智 (2018) 「古典文法学習における係り結び」 『拓殖大学 語学研究』 139  
拓殖大学言語文化研究所  
池田亀鑑 (1941a) 『古典の批判的処置に関する研究 第一部 土佐日記原典の批判的研究』 岩波書店  
伊牟田経久 (1981) 「ゾ・ナム・コソの差異: 蜻蛉日記を中心に」 『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』 大修館書店  
大木一夫 (2013) 『ガイドブック日本語史』 ひつじ書房  
沖森卓也編著, 山本真吾・永井悦子 (2012) 『古典文法の基礎』 朝倉書店  
川口喬一・岡本靖正編 (1998) 『最新文学批評用語辞典』 研究社出版  
ドナルド・キーン, 金関寿夫訳 (1984) 『百代の過客 日記にみる日本人 上』 朝日新聞社  
木下書子 (1992) 「上接語より見た係助詞『ぞ』の用法」 『尚綱大学 研究紀要』 15 尚綱大学  
木下書子 (2001) 「断りのストラテジーから見た係助詞『なむ』の用法」 『尚綱大学 研究紀要』 24 尚綱大学  
木村茂光編 (2010) 『歴史から読む『土佐日記』』 東京堂出版  
木村正中 (1963) 「土佐日記の構造」 『文芸研究』 10 明治大学文学部研究所文芸研究会  
木村正中 (1979) 「『土佐日記』の主題は何か」 『國文學 解釋と鑑賞』 44-2 (紀貫之〈醒めた意識の悲しみ〉) 至文堂  
小林芳規 (1961) 「平安時代の平仮名文の表記様式〔I〕: 語の漢字表記を主とし



- て」『国語学』44 国語学会
- 小松登美（1960）「土佐日記の解釈と文法上の問題点 I 語彙」『講座解釈と文法  
4 竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・かげろふ日記・宇津保物  
語・更級日記・大鏡』明治書院
- 小松英雄（2001）『日本語の歴史：青信号はなぜアオなのか』笠間書院
- 小松英雄（2006）『古典再入門：『土佐日記』を入りぐちにして』笠間書院
- 小松英雄（2018）『土佐日記を読みなおす：屈折した表現の理解のために』笠間  
書院
- 近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 阪倉篤義（1953）「歌物語の文章：『なむ』の係り結びをめぐって」『国語国文』  
22-6 京都大学文学部国語学国文学研究室
- 篠原宏子（1987）「土佐日記の文法」山口明穂編『国文法講座4 時代と文法』  
明治書院
- ジェラルド・ジュネット、和泉涼一・神郡悦子訳（1985）『物語のディスクリ  
ブル：方法論の試み』風の薔薇
- 白藤禮幸（1987）「古代語の文法：平安時代語」山口明穂編『国文法講座 第4  
巻 時代と文法 古代語』明治書院
- 鈴木康之（1977）『日本語文法の基礎』三省堂
- 塚原鉄雄（1958）「竹取・伊勢・土佐の文法」『日本文法講座4 解釈文法』明治  
書院
- 築島裕（1981）「土佐日記と漢文訓読」服部四郎・亀井孝・築島裕編『日本の言  
語学7 言語史』大修館書店（初出1951）
- 長田久男（1964）「土佐日記における文の構造：文の構造の記述法の試み」『論  
究日本文学』22 立命館大学日本文学会
- 西田隆政（2009）「竹取物語の会話文の『文末表現』：和文の会話文の文体的特  
徴をめぐって」『文学史研究』49 大阪市立大学
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館
- 芳賀綏（1978）「“陳述”とは何もの？」服部四郎ほか編『日本の言語学3 文法  
I』大修館書店（初出1954）
- 萩谷朴（1960）「土佐日記の解釈と文法上の問題点 II 文章構造」『講座解釈と文  
法4 竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・かげろふ日記・宇津保物  
語・更級日記・大鏡』明治書院
- 萩谷朴（1988）「青谿書屋『土佐日記』の極めて少ない独自誤謬について」『中  
古文学』41 中古文学会

- 萩谷朴（2000）『紫式部の蛇足 貫之の勇み足』新潮社
- 半藤英明（2003）『係結びと係助詞：「こそ」構文の歴史と用法』新典社
- ジェラルド・プリンス，遠藤健一訳（2015）『物語論辞典 改訂版』松柏社（初  
版原著 1989，改訂版原著 2003）
- 益田勝実（1949）「紀貫之と鳥田公鑒の国司交替」『日本文学史研究』2 日本文  
学史研究会
- 宮坂和江（1952）「係結の表現価値：物語文章論より見たる」『国語と国文学』  
29-2 東京大学国語国文学会
- 森野崇（1987）「係助詞『なむ』の伝達性：『源氏物語』の用例から」『国文学研  
究』92 早稲田大学出版部

（原稿受付 2018 年 11 月 29 日）